

近代日本洋画における「官展アカデミズム」の成立 と展開

高山, 百合

<https://hdl.handle.net/2324/2534518>

出版情報 : Kyushu University, 2019, 博士 (文学), 論文博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏 名	高山 百合			
論 文 名	近代日本洋画における「官展アカデミズム」の成立と展開			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	後小路 雅弘
	副 査	九州大学	教授	井手 誠之輔
	副 査	九州大学	准教授	京谷 啓 徳
	副 査	筑波大学	名誉教授	五十殿 利治

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

上記の論文は、明治 40 年の文部省美術展覧会(文展)設立以降、日本近代美術史の主流として、大きな影響力を持ち続けた「官展アカデミズム」の成立と展開について、具体的な作品研究や作家研究を基盤に考察したものである。

本文の構成は、6 章から成り、序章と終章、さらに巻末に資料編を加える。

第 1 章と第 2 章では、岡田三郎助と中澤弘光というふたりの官展系画家の裸婦像を対象に、モチーフの綿密な分析に基づいて考察し、単に裸婦の美しさを追求したかに見えるそれらの作品が、実は寓意的で象徴的な物語を暗喩するものであり、日本近代美術が、西洋美術に倣って、明治以来追求してきた「理想画」の一角をなすものであることを明らかにした。第 3 章では、本郷絵画研究所と春台美術展に注目し、官展アカデミズムを下支えした画学生育成システムとしての研究所と展覧会の機能について考察し、それらが官展アカデミズムを強化する役割を果たしたことを述べ、官展アカデミズムの制度的側面の一端を具体的に示した。第 4 章と第 5 章では、昭和期官展の中心画家であった中村研一を取り上げる。ともすればたんなる「風俗画」と見なされがちな戦前期の中村研一の大画面人物群像の持つ独自性や美術史上の意義について明らかにするとともに、戦時中の戦争画を経て、戦後の作品にいたる継続性について考察を深めている。第 6 章では、昭和戦後期の日展の代表画家のひとり田崎廣助を対象として、その山岳風景画について考察し、その官展アカデミズムの継承と、そこに収まらない創造性について論述する。

日本近代美術史研究においては、従来、官設美術展(官展)に対する批判的な態度のもとに展開してきた反官展系の美術が注目され、いわば「前衛」の美術史として、近代の日本美術史は語られてきた。そのため官展系の美術は、権威主義に守られた保守的で、創造性の乏しい「官展アカデミズム」として、研究の上で等閑視される傾向があった。本論文は、そうした研究上の偏りをふまえて、官展系の美術家やその作品を対象に、それを丁寧分析、考察することを基本姿勢としている。論文全体を通して、「官展アカデミズム」の名のもとに一元化され、類型化した作品群として否定的に捉えられてきた官展系の美術の、寓意性や象徴性、あるいは同時代性など、意外なほど多様で豊かな表現世界を、対象の綿密な分析と緻密な論証によって明らかにした。それは、官展アカデミズム系の美術の分析をとおして、従来の美術史を相対化しつつ、時代相に即した日本近代美術史への可能性を開くものであり、当該分野の研究におおいに貢献するものであるといえよう。

よって、本調査委員会は、本論文の提出者が博士(文学)を授与されるのに十分な能力を有することを認めるものである。